第六話　　きつねのおっさん

きょうは、きつねの長（おさ）さんに初めて会ったときの話です。

ところでこのおさは、狐たちの間では「おささん」がなまり「おっさん」と呼ばれています。しかし、これは人間のおじさんの「おっさん」とは　－　語源はもしかしたら同じかもしれないが　－　ニュアンスが異なり、そのイントネーションとアクセントは「デッサン」と同じです。ですからきつねの「おっさん」は敬称であり、以下の文章はそれを念頭に入れて読んでいただかないと、誤解を招きます。

さて、夏も暑さがピークを越えたころ、ぼくは久しぶりに秘密の湖を訪れました。久しぶりというのは仕事が忙しかったのと、休みの日は暑いのでエアコンのあるところ、例えば図書館とか公民館とかに行って、日中を過ごすことが多かったからです。もちろんうちにもエアコンはありますが、節電に協力することを心がけたわけです。家にいるときはできるだけエアコンを使わないようにしています。そのためほとんど裸ですごしています。それが健康にもいいことがわかったからです。

さて、公民館では盆踊りの準備と練習で時間を過ごしました。ぼくは町内のある役をおおせつかっており、盆踊りにつきものの屋台店の管理と駐車場の管理の責任者でした。

さて、ぼくが秘密の湖に行くことになったのは、いたちのフクスケに声をかけられたからです。森のキツネたちがぼくに会いたがっている、ということでした。森にキツネがいるのは見かけたことがあったので知っていましたが、いままでに声をかけられたことはなく、どちらかというとうさんくさそうにぼくを見ていたので、こちらも無視してきました。そしてそれは正解でした。なぜなら、昔話にたがわず、彼らは人をだます能力を持っていることがわかったからです。

フクスケはぼくと森を進みながら、言いました。「彼らは悪い連中ではないが、こいつは化かしやすいぞと見抜いたら、少々いたずらっぽくなって、ひとつふたつトリックをする。悪意はないが、それに引っかかると、子ぎつねからもいつまでも馬鹿にされるから気をつけな。」それはちょうどおとなしい人好きの犬でも、この人間は犬を怖がっているぞとわかると少しばかりうなってみたくなるのと同じだそうな。

森の中でも特に木立の茂った方面にぼくは連れて行かれました。フクスケはするすると簡単に木々の間を進んでいきましたが、ぼくはたいへんで、何度か木の根っこにつまずいたり、頭を枝にぶつけたりしました。

それできつねの集落に着いたときには機嫌が悪くなっていて、無愛想に帽子をかぶったまま挨拶しました。こんなところまで呼ぶんでなくて、自分たちが会いに来いよ、という気持ちになっていたからです。

だけど来てよかったことがすぐにわかりました。きつねたちは口々にぼくに「よくいらっしゃいました。」とからだをぼくの足になすりつけながら挨拶します。これは猫が人を歓迎するときの挨拶方法

と同じです。一段落すると、フクスケはぼくをある立派な毛並みをしたキツネのところに連れて行きました。それはこのきつねの集落の長（おさ）でした。

このキツネはニコニコ顔で言いました。「よくいらっしゃいました先生。フクスケ兄（あにい）から、あなたが来てくださると聞いて、みんな大喜びで、お待ちしていました。これから嫁入り行列が出ますので、ぜひ花嫁の門出を祝ってあげてください。結婚するのはわしの末娘です。花婿は荒船神社の神主です。」

荒船神社と聞いて、ぼくはおやっと思った。ぼくらが準備している、柑子町主催の盆踊りは公民館の近くの荒船神社の境内を借りて行われるのだ。この神社はお稲荷さんを拝し、狛犬の代わりに玉をくわえた狐の像が一対置かれており、どちらにも赤いスカーフがかけられていて、その姿はなかなか美しい。

「荒船神社の神主ならきのう用があって会ってきました。あの老いぼれじいさんにあなたの娘さんを嫁がせるのですか？」
「いえいえ、神主といってもキツネのほうの神主です。稲荷神社には人間の神主がいないものがあっても、必ずキツネの神主がいます。だから荒船神社にもきつねの神主がいてなかなか将来性のある若者です。どうぞご贔屓（ひいき）にしてやってくください。実はそこでこんど盆踊りがあるというので、キツネの子供たちに、ぜひ踊りに行かせてやりたいと思っていたところ、フクスケさんからあなたがその祭りの企画に携わってられると聞いたもので、ひとつ子供たちのお世話をお願いしたいと存じましてな。」

そのとき、なんだか霧のような雨が降り始めました。その日はとてもいい天気で太陽は照っているのですが、ふわーとした感じの雨が舞ってむして体は雨と汗で二重の湿気を帯びました。

すると「さあ、みなさんまいりましょう」という声が上がり、キツネたちは列を作り始めました。

「これがキツネの嫁入りだな。」ぼくは花嫁の父親との話を中断し、彼と行列を見るためにそちらに近づきました。するとどうでしょう、キツネたちはみるみる様子が変わっていきました。みんな二本足で立ち、美しい人間の衣装をまといます。するともう顔も人間ですが、きつねであることの証拠に口が深くさけており、鼻の先がちょっと黒い。あっ化けたな、ぼくは声になりそうな驚きを抑えて思いました。これはすばらしい。美しい！

列に加わろうとしないきつねの長（おさ）に、「あなたは一緒に行かないのですか」と聞くと、いつの間にか目に涙を浮かべていた彼は、涙声で、「それはしきたりでない」と言いました。ぼくが黙っていると、「こんどの荒船神社での盆踊りに、子供たちと一緒に私も連れて行ってもらいたいのです。そのときまで娘には会いません」と付け加えた。

ぼくはかごに乗った花嫁の化粧した優雅な容姿に見とれていた。こんな美しい子なら狐であってもお嫁さんにしたいなと心底思いました。しかしすぐに、あっ自分はまさに狐に化かされる寸前にいるのだと気づき、ふらつきかけた気を強く持ちなおし、フクスケのほうを見ました。するとフクスケもぼくのほ

うを見て、人差し指を鼻の前で左右に振って「ノンノン」のジェスチャーをしました。

さて、人間に化けたのは行列に加わったものたちだけで、見送るきつねたちは「きつね」のままでした。行列の「人々」はきつねのおっさんを過ぎるときに皆一礼します。おっさんはしばらく行列を黙って見ていましたが、最後尾が過ぎてゆくと「この変容は天気雨が降っているあいだだけです。やむとみんな野生の姿にもどります。」と言った。

陽光を受けた霧雨はこの行列の上にきれいな虹を立たせ、まるでこの虹も狐たちの行列の変容の一部のように見えました。そして雨がやむとこの虹が森の空気の中に溶けるようにきつねの行列の変容も溶けるのです。

ぼくは、きつねのおさ（今ではおっさんと呼んでいますが）に盆踊りの日に迎えに来ると約束しました。フクスケはお礼に名物けつねうどんをご馳走になりました。ぼくは行列をスケッチしたいと思い、その姿を記憶にとどめるべく行列のあとについて帰りたかったので、ご馳走は遠慮して先に失敬しました。

行列を見失わないよう霧雨の中を彼らが行った方向に追いかけてゆくと、来たときにはこの道はこんな広々としてなかったのに、ずいぶんゆったりとしていて、つまずいたり枝に頭を打つこともうありませんでした。

秘密の湖のほとりを通り、竹やぶのトンネルをくぐって、森の出口に近づいたころには、霧雨はほとんど上がり、虹はもう消えそうでした。足並みをそろえてゆっくりと進む行列の落ち葉を踏む足音とともにこの話もここで、溶けます・・・